

私は幸運にも 20 年以上も前から日本とかかわり始めました。そして、時を重ねるごとに、私のこの大国に対する評価は非常に高まりました。日本は、古くからの文明を持ち、イタリアと同じく何千年も前から続く歴史、文化、創造力、人々の才能、新しいことに対する弛まない追求、調和と均衡を備えた完璧さを持っております。そのような日本に対して、イタリアは非常に大きな関心を抱いております。

まずはイタリア銀行、次にイタリア政府および国会における職務を通じて、私は長年にわたって日本との関係における仕事および活動を重ねてきました。私の経験は、イタリアが、生産分野および文化組織において、日本という大国の関係を深めることにどれほど大きな関心を寄せてきたかを物語る、ほんの小さな個人的な証言です。そして、ユーラシア大陸の両端のそれぞれに位置するイタリアと日本という、二つの大国の距離を縮めることをめざして、日本において実現されたイタリア関係のプログラムは大きな意義を持つものです。

日伊両国の人々の歩み寄りと相互理解を推進するための催しはたくさんありましたが、その中でも「日本におけるイタリア 2001-2002 年」（イタリア年）の催しをあげておきたいと思います。この催しを引用するにあたりまして「とりわけ」という言葉を添えたいと思います。といいますのも、これはイタリアが、日本を含めた世界において実現させたイタリアという国の最大の振興イニシアティブと言えるからです。当時、私はイタリアの外相であり、東京においてその開会を宣言する光栄を得たのでした。この催しについては、**2001 年**という年全体において（そして、日本の皆様の好評を得て **2002 年**上半期も催しが続けられたのでした）、**イタリアの一部 - 特に、芸術、文化、最新技術、経済**など、一言で言えば「**イタリアのライフスタイル**」に代表されるイタリア - が日本に移動したかのようでした。

この催しの期間、東京だけでなく、日本の他の **124** 都市においても、**800** を越すイベントが実現されたのであり、歴史や芸術、産業、さまざまな才能など、イタリアが余すところなく紹介されたのでした。

その後、**2005 年**愛知万博における「**イタリア館**」や「**2007 年**イタリアの春」といった、イタリアと日本の関係にとってイタリア年と同様に意義深いイベントが続きました。そして今、ジョルジョ・ナポリターノ大統領の日本の公式訪問とともに、「日本における**イタリア 2009 年**」が始まろうとしています。

この本が記念しようとしている伊日財団 **10 年**の活動においては大きな歩みを実現されたといえます。日本とイタリアの関係は急速に深まり、両国の人々の相互理解において質的に大きく前進が見られたと言えます。この実現の背景には、相互の並々ならぬ努力だけでなく、この努力がいかに必要であるかということについての認識と意識があったのでした。

ランベルト・ディーニ  
イタリア共和国上院外事委員会委員長